

# ふくしま移住女性支援

## 2016 年報告書

プロジェクト名	ふくしま移住女性エンパワメント・プロジェクト 2016
実施期間	2016 年 1 月～12 月
実施地域	福島県福島市、白河市、須賀川市、いわき市、郡山市ほか
実施団体	◆福島移住女性支援ネットワーク（EIWAN） ◆外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会（外キ協）
目標	これまでの活動実績（2011 年 9 月～2015 年）とネットワークを活かして、福島県内の外国にルーツを持つ移住女性とその子どもたちを対象に、自立支援・教育支援活動を、地元市民との協働によって展開する
実施項目	(1) 日本語学習の支援——福島サロンと白河サロン (2) 地元市民と移住女性の協働をめざす 「からふるカフェ」「やさしい日本語で防災ワークショップ」 (3) 放射能被害に関する情報提供 (4) 移住女性の子どもへの支援——学習支援と継承語教育支援 (5) 移住女性とその子どもの保養——和歌山／京都／奥会津 (6) 移住女性「ふくしま My Story」記録化 (7) 労働・生活・DV・在留問題の相談活動／社会保障ハンドブック (8) ネットワークづくり (9) 情報発信

### 1. 被災6年目の「ふくしま」

#### 《外国人被災者》

- 2011 年 3 月 11 日、東日本を襲った大地震・津波、そして東京電力第一原発の崩壊事故から 6 年、死者 15,894 人（そのうち外国人死者は 33 人）、行方不明者 2,561 人となり、震災関連死者は 3,410 人に上る（2016 年 3 月現在）。
- 福島県に住所を置く外国人は 11,456 人である（2016 年 6 月末現在）。国籍別の内訳は、中国 3,602 人、フィリピン 2,400 人、韓国・朝鮮 1,698 人、ベトナム 1,038 人、ネパール 467 人、タイ 324 人、米国 271 人、インドネシア 208 人、ブラジル 199 人、ミャンマー142 人……と続く。
- その外国人県民を大別すると、日本の植民地支配に起因する在日コリアンなど「特別永住者」は 1,070 人であり、それ以外のニューカマーの「移住者」は 10,386 人である。移住者の在留資格別内訳では、「永住者」4,299 人、「技能実習」2,278 人、「日本人の配偶者等」1,048 人、「留学」710 人、「定住者」529 人……となり、「永住者」が外国人総数の 37.5%を占める。

#### 《国際結婚移住女性》

- 福島県の市町村に住民登録をしている外国人の数は、<図 1>に見るように、リーマンショック、そ

して震災によって減少したものの、2013年から微増している。

- ただ、避難地域だけではなく、県民のうち 39,818 人が「住民登録地」をそのままにして県外に避難している（2017年1月現在）。したがって、外国人住民の中には「現住所」を異にしている人たちが少なからずいるが、その数は把握できない。
- 福島県の外国人住民の特徴として、その性比で「女性 100 人」に対して「男性 59 人」というように、女性が圧倒している。それは<表 1>に見るように、日本人と結婚して福島に定住し永住している国際結婚移住女性が多いからである。



\* 福島県「福島県の国際化の現状」（2016年）と法務省「在留外国人統計」（2016年6月分）から土田久美子作成

**表 1 1992～2014年の東北3県の「妻外国人・夫日本人」カップルの国籍別統計**

	妻：外国・夫：日本人総数		妻：韓国朝鮮		妻：中国		妻：フィリピン	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
岩手県	3,389		425	12.54%	1,690	49.87%	942	27.80%
宮城県	6,444		2,378	36.90%	2,385	37.01%	1,003	15.56%
福島県	7,769		870	11.20%	3,580	46.80%	2,411	31.02%

\* 厚生労働省の人口動態統計により李善姫作成。%は妻外国人・夫日本人の結婚総数に対する比率

### 《問題の多重化》

- 東日本大震災の発生から6年目を迎えた福島県の移住女性たちの生活には、震災と原発事故に関連した問題と、日本社会における国際結婚移住女性たちに共通する常態化した課題の両方が併存している。言い換えると、震災後の福島県において、移住女性が直面する課題は多重化し、従来から存在した配偶者・家族問題と、放射能による影響への不安とが積み重なっている。
- そうした課題を解決していくためには、移住女性の存在が可視化されること、移住女性みずからが知識とスキルを獲得していくこと、行政および地域社会が移住女性の存在についての知識と経験を蓄積していくことが重要である。
- しかし、福島県の移住女性たちは、<表 2>に見るように、福島市・郡山市・いわき市に集中する一方で、小さな町・村にも広く点在している。したがって、彼女たちのニーズを全体的に把握するには困難を伴わざるをえない。

○このような状況の中で、私たちは 2016 年も試行錯誤を繰り返しながら、さまざまなプログラムを実施した。

**表2 福島県の市区町村別／男女別「外国人住民」数の推移**

- ・ Aは、**2011年3月15日抽出**の「外国人登録者」数。 [出典] 法務省提供資料。
- ・ Bは、**2013年3月31日現在**の「外国人住民」の住民基本台帳人口。 [出典] 総務省ホームページ。
- ・ Cは、**2016年1月1日現在**の「外国人住民」の住民基本台帳人口。 [出典] 総務省ホームページ。

市町村名	(A)2011年3・11	(B)2013年3月末			(C)2016年1月1日現在		
		男	女	計	男	女	計
《総計》	10,758	2,848	6,269	9,117	4,007	6,838	10,845
福島市	1,682	465	881	1,346	662	1,004	1,666
会津若松市	741	248	393	641	267	404	671
郡山市	1,870	601	987	1,588	848	1,134	1,982
いわき市	1,803	549	938	1,487	795	1,087	1,882
白河市	664	154	335	489	184	319	503
須賀川市	298	95	162	257	116	174	290
喜多方市	203	33	149	182	38	151	189
相馬市	181	34	120	154	56	140	196
二本松市	313	65	220	285	83	216	299
田村市	363	42	221	263	53	223	276
南相馬市	210	30	115	145	103	181	284
伊達市	314	55	216	271	118	233	351
本宮市	132	34	88	122	55	88	143
伊達郡桑折町	47	16	28	44	8	28	36
国見町	65	9	50	59	8	53	61
川俣町	104	27	60	87	34	64	98
安達郡大玉村	44	12	29	41	15	16	31
岩瀬郡鏡石町	47	14	18	32	21	29	50
天栄村	46	26	29	55	25	23	48
南会津郡下郷町		7	20	27	4	18	22
檜枝岐村		1	1	2	1	1	2
只見町		0	8	8	0	9	9
南会津町		18	41	59	18	49	67
耶麻郡北塩原村		3	12	15	11	10	21
西会津町		6	20	26	4	40	44
磐梯町	9	2	5	7	3	6	9
猪苗代町	66	17	38	55	18	35	53
河沼郡会津坂下町	58	7	53	60	7	54	61
湯川村	10	1	7	8	1	8	9
柳津町		4	10	14	3	8	11
大沼郡三島町		1	6	7	0	6	6
金山町		1	3	4	1	4	5
昭和村		0	3	3	1	4	5
会津美里町	45	11	31	42	9	26	35
西白河郡西郷村	151	42	128	170	77	117	194
泉崎村	74	12	48	60	23	56	79
中島村	11	3	10	13	13	12	25
矢吹町	121	27	57	84	55	59	114
東白川郡棚倉町	86	29	45	74	35	46	81

矢祭町	20	2	13	15	2	18	20
埴町		5	59	64	17	61	78
鯨川村		1	11	12	1	13	14
石川郡石川町	80	7	60	67	15	81	96
玉川村	34	9	32	41	23	37	60
平田村	90	17	46	63	44	59	103
浅川町	26	11	20	31	10	28	38
古殿町	78	3	47	50	8	45	53
田村郡三春町	67	9	42	51	14	45	59
小野町	107	26	80	106	25	47	72
双葉郡広野町	40	4	14	18	11	14	25
楡葉町	32	5	19	24	7	17	24
富岡町	84	11	50	61	10	46	56
川内村	34	2	27	29	3	33	36
大熊町	71	13	37	50	13	33	46
双葉町	28	4	23	27	4	23	27
浪江町	118	8	45	53	4	41	45
葛尾村	7	0	5	5	0	6	6
相馬郡新地町	31	10	21	31	22	19	41
飯館村	36	0	33	33	1	37	38

## 2. プログラムの目的と実施内容

### (1) 日本語学習の支援

- このプログラムは、日本語が不自由なために家庭と地域社会において孤立せざるをえなかった移住女性のコミュニケーション能力を高めると共に、就職機会の拡大と、人権と生活に関わる問題解決能力を獲得するために必要な日本語運用能力を身につけること、すなわち「人権としての日本語識字学習」を支援することを目的とする。
- 移住女性たちは日本に来て5年、10年、あるいは20年以上になる。しかし彼女たちは、日本語での日常会話ができても、日本語を読むことと、書くことは、きわめて困難である。
- 日本語サロン福島教室と白河教室は、震災直後に結成された「ハワクカマイ（手をつなごう）福島」と「ハワクカマイ白河」に集まるフィリピン人女性を対象として、2013年から始めた。福島教室はEIWAN事務所「ふくしま活動スペース」で、白河教室は公民館を借りて、地元市民のボランティアが移住女性たちの日本語学習を支援している。
- 毎年7月と12月に日本語能力試験が実施されるが、希望者にはその受験料と交通費などを支援している。これは、パートの仕事を得ようとしても、職種も待遇も限られている移住女性たちが、履歴書に一つでも資格取得を書くことができれば、と考えたからである。

### 《福島サロン》

- 日本語サロン福島教室では、毎週木曜日と月2回の土曜日、午前10時～12時に開催している。学習者は各回1～6人。7月と12月に実施される日本語能力試験（JLPT）を大きな目標として、各学習者のレベルに合わせたテキストを使い、基本的に学習者とサポーターが1対1で学習を進めている。休憩時間にはお茶を飲みながら皆でおしゃべりをし、お互いの国のことを学べるのも、楽しみの一つとなっている。
- 前年までは、学習者の仕事のスケジュールと開催曜日・時間が合わなかったためか、学習者数が安定

せず、時にはサポーターが3名いても学習者ゼロという日もあった。2016年は、以前から参加していた学習者による口コミとともに、福島県国際交流協会からの紹介や、Facebook を見ての参加などにより、学習者数が増え、国籍もフィリピンだけでなく、ベトナム、バングラデシュ、フィジー、韓国、中国と多様化した。

- これまでの学習者は、日本滞在歴が長く、日常会話にはほぼ不自由しないフィリピン女性たちがほとんどで、主に漢字の読み書きを中心に学習してきた。だが、新たに加わった学習者は、会話もまだ初級レベルで、サポーターが説明に苦勞する場面があった。学習者の日本語レベルがまちまちな上に、サポーターの人数が足りないため、同レベルの人たち2人にサポーター1人というスタイルにしても、1人で自習せざるを得ない学習者が出てしまう。サポーターの増加とともに、学習の進め方の工夫が、今後の課題である。
- 12月17日、1年の締めくくりとして「お疲れ様会」を開催した。その中で「今年の個人的な3大ニュース」を1人ずつ発表してもらったところ、学習者のほとんどが「EIWANの日本語サロンで勉強を始めたこと」や、「EIWANの日本語サロンでみんなに出会えたこと」を挙げてくれた。日本語学習というプログラムを通じて、外国籍住民にとっての居場所づくりができていよう、サポーターの一人として嬉しく感じた。
- 日本語サポーターの要件として「資格も経験もいらない」としているが、現在のサポーターたちは学習者の熱心さに刺激され、教えるための知識やスキルを向上させたいと思い始めている。2017年は学習者の増加に対応できるよう新しいサポーターを確保するとともに、サポーターたちのスキルアップへの意欲を支えるような取り組みも検討していきたい。

### 《白河サロン》

- 日本語サロン白河教室は、日曜日の月2回、午後2時～4時、実施している。2016年は、うどんをはじめ、各国の料理を作る新年会から始まった。白河クラス発足当初から2015年までは、ほとんどフィリピン出身の学習者で占められていたが、2015年後半からベトナム出身の研修生・技能実習生が増え、現在では逆転し、ベトナム出身学習者が多くなっている。その他、中国、カンボジア、インドネシア出身学習者の他、外国語指導助手（ALT）の参加も見られる。そのため学習者は2016年前半は各回17人前後であったが、8月以降は平均28人へと急増した
- 学習者の変化もあり、2016年は日本語能力試験（JLPT）対策がほとんどであった。JLPT3カ月前に願書に記入し、JLPTを受験、1～2週間後に慰労会、という流れができてきている。
- 月に2回のペースということや、学習者と支援者の割合から見ても、十分な支援はできないが、各個人が勉強する際のヒントや弱点の発見など気付くことができたと思う。1回が約1時間30分の勉強では、とても真剣に勉強に取り組む様子が見られた。勉強の後の茶話会では、各国の母語になることが多いが、家族や仕事での悩み・相談をする様子もあり、勉強だけではなく人間関係の構築にも役立っていると思う。年に2回の慰労会では、勉強面では目立たない学習者が、別の面（準備や料理など）で能力を発揮することができている。学習者も支援者も、それぞれの得意分野を生かして日本語サロン白河教室を盛り上げていけるよう、2017年も魅力ある活動を続けていきたい。

表3 日本語サロン福島と白河（2016年1月～12月）

	●福島サロン●（実施日／学習者／サポーター）	●白河サロン●（実施日／学習者／サポーター）
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・14日（木）／0／3人</li> <li>・23日（土）／0／2人</li> <li>・30日（土）／1人／1人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・21日（木）／2人／3人</li> <li>・28日（木）／0／2人</li> <li>◆24日（日）新年会、参加者30人</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4日（木）／1人／2人</li> <li>・25日（木）／1人／2人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・20日（土）／2人／3人</li> <li>・27日（土）／1人／2人</li> <li>・7日（日）／9人／4人</li> <li>・21日（日）／17人／5人</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3日（木）／2人／2人</li> <li>・12日（土）／0／2人</li> <li>・19日（土）／0／1人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10日（木）／2人／3人</li> <li>・17日（木）／3人／3人</li> <li>・24日（木）／2人／2人</li> <li>・13日（日）／14人／4人</li> <li>・27日（日）／17人／3人</li> </ul>

	・31日(木) / 3人 / 2人	
4月	・7日(木) / 1人 / 1人 ・21日(木) / 3人 / 2人 ・28日(木) / 4人 / 2人	・14日(木) / 1人 / 2人 ・23日(土) / 3人 / 3人 ◆10日(日) やさしい日本語で防災ワークショップ、参加者 20人 ・24日(日) / 17人 / 5人
5月	・12日(木) / 3人 / 2人 ・19日(木) / 2人 / 2人 ・26日(木) / 2人 / 2人	・14日(土) / 3人 / 2人 ・21日(土) / 1人 / 2人 ・15日(日) / 22人 / 4人 ・29日(日) / 17人 / 5人
6月	・2日(木) / 3人 / 3人 ・16日(木) / 2人 / 3人 ・23日(木) / 1人 / 2人 ・30日(木) / 5人 / 2人	・9日(木) / 3人 / 3人 ・18日(土) / 2人 / 3人 ・25日(土) / 3人 / 2人 ・5日(日) / 18人 / 4人 ・19日(日) / 23人 / 4人 ・26日(日) / 21人 / 4人
7月	◆3日(日) 日本語能力試験を2人が受験 ・7日(木) / 2人 / 3人 ・16日(土) / 4人 / 3人 ・30日(土) / 4人	◆3日(日) 日本語能力試験を12人が受験 ◆10日(日) サマーパーティ、参加者 42人 ・24日(日) / 7人 / 6人
8月		・7日(日) / 9人 / 3人 ・21日(日) / 26人 / 3人
9月	・1日(木) / 2人 / 2人 ・8日(木) / 4人 / 2人 ・15日(木) / 4人 / 2人	・3日(土) / 2人 / 2人 ・10日(土) / 3人 / 3人 ・29日(木) / 2人 / 2人
10月	・6日(木) / 5人 / 3人 ・13日(木) / 2人 / 2人 ・27日(木) / 3人 / 2人	・8日(土) / 6人 / 2人 ・20日(木) / 3人 / 2人 ・29日(土) / 4人 / 4人
11月	・10日(木) / 0 / 3人 ・17日(木) / 4人 / 3人 ・24日(木) / 4人 / 2人	・12日(土) / 5人 / 3人 ・20日(日) / 6人 / 2人 ・13日(日) / 32人 / 6人 ・20日(日) / 31人 / 6人 ・27日(日) / 31人 / 5人
12月	◆4日(日) 日本語能力試験を3人が受験 ・1日(木) / 6人 / 3人 ・8日(木) / 5人 / 3人 ◆17日(土) おつかれさま会、参加者 12人	・3日(土) / 6人 / 3人 ・15日(木) / 3人 / 4人 ◆4日(日) 日本語能力試験を24人が受験 ◆18日(日) クリスマスパーティ、参加者 4人

## (2) 地元市民と移住女性の関係づくり

○このプログラムは、地元市民と移住女性たちが地域の震災復興と多文化共生社会をめざして協働する関係づくりを目的とする。

### 《からふるカフェ》

- 被災した地元市民と移住女性たちがともに学び、多文化共生に向けての具体的な提案と実施に向けた道筋を話し合いたいという願いから、「からふる(多文化)カフェ」を、2015年4月から開催している。これは、2014年に開催した「World Women's Cafe」の経験や、参加者からの強い要望によるプログラムである。
- 「からふるカフェ」では、地域の人びとが移住女性たちと出会い、移住女性たちも地域の人びとに出会い、お互いの存在を理解し合う。フォーマルな形式で講演を聞いたり勉強会を開いたりするのではなく、気楽にお茶会をするような雰囲気でお互いの違いや共通点を共有できる場づくりをめざしている。
- カフェでは、ゲストスピーカーの出身国のお菓子などを食べながら、話し合う。参加者は毎回変動するが、みな国籍も職業も年齢も異なる、文字通りカラフルお茶会である。
- 2016年1月17日、第11回「からふるカフェ」では、梁淑姫さん(韓国出身)を招いて、「多文化の歴史と文学」をテーマに話してもらった。
- 2月20日、第12回「からふるカフェ」のテーマは、「ドリーム・マップを作ろう」。高橋とし恵さんと石川友里さんをゲストに迎えて、参加者一人一人がドリーム・マップを作っていた。
- 3月13日、第13回「からふるカフェ」は、「外国につながる子どもたち」と題して、日中ダブルの

大学生に話してもらった。

- 5月22日、第14回「からふるカフェ」は「からふる食堂」。これまでの参加者から、「料理を通じていろいろな国の文化を知りたい」というリクエストに応じて、今回は、「軽食／デザート」をテーマにした「からふる食堂」とした。会場選びから料理の提供まで、多くの協力をいただいた。
- 9月11日に開催した第15回「からふるカフェ」では、仙台から田所希衣子さん（外国人の子ども・サポートの会）を招いて「多文化と子どもの進学について考える」。今回のカフェは、同日に二本松市にある福島県男女共生センターで行なわれた「未来館フェスティバル」の参加プログラムとして開催した。
- 11月26日、第16回「からふるカフェ」を、縄文時代の遺跡「じょーもぴあ宮畑」で開催。福島日本語サロンの学習者とサポーター15人が、4000年前の福島の暮らしを学びながら芋煮会をした。
- 2016年の「からふるカフェ」は、毎月ではなく2～3カ月に1回のペースで開催し、いろいろなテーマ、さまざまな形態で実施した。特に、同じテーブルを囲んでお互いのことを気軽にわかり合えるような機会を作ることに注力した。2017年は移住女性が持つさまざまな社会的・経済的自立可能性を、女性たち自身や地元の人びとが再発見するようなテーマと形態に挑戦したい。 **【土田久美子】**

### 《やさしい日本語で防災ワークショップ》

- 宮城県石巻市と気仙沼市での2012年・2013年調査によると、震災前、移住女性の多くは、「ツナミ」という言葉を知っていた（86%）。しかし、沿岸部では地震直後に「高台に避難してください」と呼びかけられたが、「タカダイ」という言葉を知らなかった移住女性は39%にもなる。このことは、地震と津波が多発する日本で、外国人住民に配慮した防災計画が立てられ、防災訓練などが十分に実施されてこなかったことを示している。
- 京都府で2009年に『外国人のための防災ガイドブック』の企画・編集にたずさわった《やさしい日本語》有志の会代表の花岡正義を講師として、2016年も前年に続いて「やさしい日本語による防災ワークショップ」を開催した。
- 1月30～31日、山形県酒田市の日本語教室「べにばな会」スキルアップ研修会に、出前講座。これは、2015年10月に福島大学で開かれた「日本語学習支援ネットワーク」で私たちが呼びかけたチラシを見て、「べにばな会」から開催の申し出があり、実現したものである。
- 4月10日、白河中央公民館で開催。参加者は白河サロンのフィリピン・ベトナム・中国・オーストラリア・ジャマイカ・イギリス出身者の学習者と日本語サポーターの計20名である。最初に、地震や台風などに備えての知識や備蓄について学習した。東日本大震災以降に来日した人が多かったせいか、震災時の画像を見て驚いている様子が印象に残る。また、「Lifeline」と「ライフライン」の違いをはじめ知った英語話者もいた。その後いくつかのグループに分かれ、「ハザードマップ」を見ながら自分の住所や勤め先、避難所などを確認した。講座の約1週間後、熊本地震が発生したが、その後の日本語サロンで「地震が発生した時に、どうしますか」と聞いたら「机の下に入って体を守る」「スーパーではカゴで頭を守る」などのことが知識として頭にある、との報告を受けた。
- 10月5日、会津喜多方国際交流協会で開催。参加者はベトナム・イギリス・アメリカ・フィリピン・スペイン出身者と日本語教室講師の計17名。内容は白河とほぼ同じであったが、大きな違いは「防災グッズ」の展示があったことである。国際交流協会が所有するものや市の消防署から借りてきたものを会場に展示してもらい、どんな使い方をするか、どこで売っているか、価格などを説明した。
- 11月18日、郡山市役所に出前。これは「ワークショップ」というより、EIWANの取り組み（防災講座）を郡山市内で開催するために、市役所国際政策課（郡山市国際交流協会）の職員の方知ってもらおうということで行なった。外国人向けの「防災講座」と日本人や日本語ボランティア向けの「やさしい日本語」2本のパワーポイントを使って、災害時に外国人住民はどんな状況に陥るか、防災意識に乏しい外国人にどうすれば情報が伝わるか、外国人住民を災害から守るにはどうすればいいかなど、具体的に説明し、理解を得ることができた。

- 2016年、EIWANは福島県内で「出前講座」を行なう計画で、まず福島県国際交流協会に協力を依頼、協会から県内の地域国際交流協会や日本語教室に案内していただいた。EIWANからも直接、いくつかの団体に案内をしたところ、福島県内では「会津喜多方国際交流協会」で唯一開催できた。2017年も、ひき続き「出前講座」を開催していきたい。

### **(3) 放射能被害の情報提供**

- このプログラムは、放射能被害に関して、移住女性に正確な情報を提供することを目的とする。
- 福島第一原発の崩壊事故は、7年目を迎えようとしている現在でも、まだ収束していない。とくに子どもを持つ移住女性の場合、子どもの健康に及ぼす影響を深刻に考えざるをえない。しかし、移住女性にとって、放射能汚染をめぐる現在の状況を理解し判断することは困難である。
- 2014年に私たちが実施したアンケート調査でも、日本語能力における個人差が大きい移住女性たちにとって、放射能が身体に及ぼしうる影響に関する基礎知識や、地域ごとに異なる放射線濃度についての情報などは、見つけにくい、もしくは情報が難解な日本語で記載されているために、理解できない場合が多いからである。
- そのため移住女性の多くは、今では「考えること」をあえて停止してしまっているように見える。
- 私たちはまず、放射能に関する基本的な情報を、やさしい日本語、あるいは移住女性の母語で伝えようと考え、国際協力NGOセンター／ADRA Japan／こどもみらい測定所が編集したブックレット『はかる、知る、くらす——子どもたちを放射能から守るために、わたしたちができること』（2014年3月発行）の中の「これから暮らすためのポイント集」のイラストと用語解説を、タガログ語に翻訳し、その小冊子を広く移住女性に読んでもらうことを企画した。その翻訳・編集作業を2015年から始めたが、最終段階で難航している。
- もう一つの課題は、福島県内の外国人全体を対象とする、自治体・研究者・NGOの共同調査である。その可能性を今後も引き続き追求したい。

### **(4) 移住女性の子どもへの支援**

- このプログラムは、移住女性の子どもたちの学習を支援していくこと、また、移住女性と日本人男性との国際結婚から生まれた子どもたちが、「ダブルの文化」をもつ人間としての自覚と尊厳を育む継承語教育を支援していくことを目的とする。

#### **《ほうらい子どもの日本語教室》**

- 震災前から福島市で日本語教室を担ってきた蓬萊日本語教室は、2015年5月から「子どもの日本語教室」をEIWAN事務所の「ふくしま活動スペース」で開始した。教室は週1回、外国にルーツをもつ子どもを対象に開かれている。教室運営は蓬萊日本語教室が担っている。
- 「ほうらい子どもの日本語教室」の対象は、小学1年生から高校3年生、または18歳までの日本語指導が必要な子どもたちで、国籍は問わない。金曜日の放課後、3時から7時までの90分間、好きな時間に来て、日本語指導を受けたり、学校の宿題をしたりしている。指導するスタッフは2名。
- 現在、小学1年生から中学3年生までの子どもが通っている。日本生まれで日本国籍の子どもも、数人いる。子どものルーツ、つまり出身地や母語、親の出身地などでみると、中国、フィリピン、バングラディッシュ、フィジー、ルーマニアなど、さまざまなルーツの子どもが通っている。みんな、国や年齢の差も気にせずにとっても仲良く、助け合って勉強している。子どもたちが集まると、楽しくて、近所の迷惑になるのではないかと心配するくらい、みんなたくさん話してくれる。学校ではなかなか表現できないことも、この教室では表現できて、子どもたちのストレス発散の場、居場所になっているようである。勉強の後、みんなで食べるオヤツが楽しみで来る小学生もいる。

- 2016年は、教室開催53回（個人指導10回含む）、登録者数9人、延べ188人の子どもが教室に来てくれた。
- 教室活動の他、9月17日、福島市アクティブシニアセンターA・O・Zで開催された「結・ゆいフェスタ2016」に参加し、フィリピン出身の中学生が、英語で絵本の読み聞かせを披露した。
- また6月18～19日、蓬莱日本語教室の主催／EIWANの共催で「多文化キッズキャンプ」を行なった。貸切の大型バスで福島駅—二本松駅—郡山駅と回り、国立磐梯青少年交流会館に集合した。福島県内の外国にルーツを持つ子どもたち25人と、そのお母さんたち11人、そしてボランティア、計50人が参加した。これは震災後、毎年開催されてきたプログラムで、今回はEIWANがバス代を支援した。
- 福島県は外国人散在型の地域であり、「外国にルーツを持つ子ども」たちも、学校にただ一人在籍することが多い。このような、学校で孤軍奮闘している子どもたちに、仲間と出会い勇気と希望を持ってもらうこと、保護者には、子どもを日本で育てるために不足している情報を提供し、保護者同士のネットワークを広げてもらうことを目的に、「多文化キッズキャンプ」を実施した。
- 2017年も、皆さんのご支援のもと、子どもの日本語教室を楽しく開催していきたい。

### 《継承語教室への支援》

- 震災直後の2011年5月、須賀川市に住む中国人移住女性たちは、子どもの命と健康を守るために「つばさ～日中ハーフ支援会」を結成した。彼女たちは子どもたちのために保養プログラムを実施すると共に、公民館を借りて月2回、彼女たちの子ども（ダブルの子ども）たちを対象に継承語＝中国語教育を始めた。
- 「つばさ」に続いて、2014年1月、いわき市でも移住女性たちが「福島多文化団体～心ノ橋」を結成し、5月から継承語教室を始めた。ただ教室運営は、一人の中国人女性によって担われており、なかなか安定しない。そのため私たちは、2014年11月から、その継承語教室の運営費用を支援することにした。また2015年7月からは、中国帰国者の方が書道教室の先生を務めてくれている。
- 2015年3月、郡山市でも移住女性たちによって「日中文化ふれあいの会～幸福」が新たに結成され、公民館を借りて月2回、継承語教室を始めた。
- 震災後、福島県内で3つの継承語教室が生まれたことになる。被災地で、しかも移住女性たちの力によって立ち上げたことは、特筆すべきことである。

表6 いわき市「心ノ橋」の継承語教室（2016年1月～12月）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月9日（土）学習者4人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・1月13日（水）学習者2人</li> <li>・1月23日（土）学習者4人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・1月30日（水）学習者5人（書道教室）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月6日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・2月20日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・2月27日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月5日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・3月9日（水）学習者4人</li> <li>・3月19日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・3月23日（水）学習者4人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月9日（土）学習者4人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・4月16日（土）学習者3人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・4月20日（水）学習者3人</li> <li>・4月30日（土）学習者3人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・5月14日（土）学習者4人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・5月21日（土）学習者3人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・5月25日（水）学習者3人</li> <li>・5月28日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月4日（土）学習者4人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・6月11日（土）学習者3人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・6月15日（水）学習者3人</li> <li>・6月18日（土）学習者3人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月9日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・7月16日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・7月20日（水）学習者5人</li> <li>・7月23日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月13日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・8月17日（水）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・8月20日（水）学習者5人</li> <li>・8月27日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月10日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・9月17日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・9月21日（水）学習者5人</li> <li>・9月24日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10月8日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・10月15日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> <li>・10月19日（水）学習者6人</li> <li>・10月22日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月12日（土）学習者6人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月3日（土）学習者5人（書道教室+中国語教室）</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月16日(水) 学習者6人</li> <li>・11月26日(土) 学習者5人(書道教室+中国語教室)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月14日(水) 学習者6人(書道教室+中国語教室)</li> <li>・12月17日(土) 学習者5人</li> <li>・12月24日(土) 学習者6人(書道教室+中国語教室)</li> </ul>
--	--

### 《子ども多文化フォーラム》

- 11月19日、郡山市立中央公民館において「第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラム」を開催した。今回は、2015年4月に須賀川市で開催した第1回の「子ども多文化フォーラム」より参加団体や後援団体が増えたこと、なによりも生き生きと発表する子どもたちが増えたことは、大きな成果である。その子どもたちを見守るお母さんたちの微笑みが、とても印象的だった。
- 雨にもかかわらず、外国にルーツをもつ子どもたちが約60人、移住女性たちが約60人、一般参加者をふくめて、計170人が参加。
- 今回のフォーラムでは、福島県国際交流協会／郡山市国際交流協会／いわき市国際交流協会／猪苗代町国際交流協会／ふくしま連携復興センター／福島民友新聞社／福島民報社／駐新潟中国領事館／駐仙台韓国領事館／仙台韓国教育院／民団福島県本部／民団宮城県本部／新潟県華僑華人総会、計13団体が後援してくれた他、全国各地からカンパが寄せられた。
- 第1回子どもフォーラムの参加団体は、4つの中国語教室と、1つの韓国語教室だったが、今回は新規に3つの教室が加わって、母語＝継承語教育の実践交流を図ることができた。

地域		参加教室	継承語	第1回(2015年)	第2回(2016年)
福島県	須賀川市	「つばさ一日中ハーフ支援会」	中国語	○	○
	いわき市	「福島多文化団体 心ノ橋」	中国語	○	○
	郡山市	「日中文化ふれあいの会 幸福」	中国語		○
宮城県	仙台市	「瀛華(インカ)中文学校」	中国語	○	○
	仙台市	「チングドゥル」⇒ハングル学校宮城	韓国語	○	○
山形県	山形市	「IVY子ども中国語教室」	中国語	○	
	山形市	「山形ムグンハ」	韓国語		○
新潟県	上越市	「上越中文教室」	中国語		○

- 第1回フォーラムの成果は大きく、今回、駐新潟中国総領事館から上越市の「上越中文教室」を紹介され、また仙台韓国教育院からは山形市の「山形ムグンハ」を紹介された。特に駐新潟中国総領事館は、「上越中文教室」の旅費を補助してくれた。これは、継承語教室同士の交流を高く評価してくれたからであろう。
- 今回の発表原稿はすべてパワーポイントで提出することにしたが、慣れないパワーポイント作成に四苦八苦していた教室がいくつかあった。その点は、事務局としても反省。
- フォーラムの第一部は、7つの教室の子どもたちによる文化発表である。劇、歌、踊り、詩の吟唱など内容が豊かで、衣装もすごく華やかであった。各教室の先生や保護者に伺ったところ、ほとんどの小道具や飾り、衣装などは手作りだという。彼女たちの意気込みに、改めて感服した。この「手作りの多文化」に、一般参加者の方々に「多文化の豊かさ」を少しでも感得してもらうことができただろう。
- 第二部は「移住女性円卓会議」として、7つの教室のリーダーに、それぞれが直面している課題を挙げてもらった。最後に、「ふくしま移住女性アピール2016」を読み上げ、継承語教室を運営し地域社会と交わる移住女性たちの取り組みに、地域社会、日本社会からの応援を呼び掛けた。
- 東日本大震災から6年、多文化が共生する豊かな地域社会の実現をめざす移住女性と日本人の願いと想いを、福島から発信することができたことの意味は大きい。福島継承語教室は、すべて震災後にできた教室である。これら継承語教室が歩んできた道は、地域復興の道とも言えよう。

○フォーラムの諸費用のほとんどは、「ふくしま未来基金」の助成金によって支えられた。心から感謝したい。

#### **(5) 移住女性とその子どもの保養**

○いま福島に住む家族、とりわけ女性と子どもたちには「保養」が必要である。実際、さまざまな団体・教会が保養支援に取り組み、実施している。しかし、移住女性にとっては「言葉の壁」があって、その支援情報になかなかたどりつけない。また支援情報を得ても、申請書の詳細を書くことができず、途中で諦めてしまう。このように移住女性のほとんどが、保養プログラムを利用できていない。そのため私たちは、2014年から移住女性とその子どもたちを対象とする保養プログラムを始めた。

○市民団体「リフレッシュサポート」／「311 受入全国協議会保養促進ワーキンググループ」がまとめた『原発事故に伴う保養実態調査——調査結果報告書』（2016年7月）によると、2014年11月からの1年間で①234団体が保養を実施し、約15,000人以上の福島県民が保養に行ったこと、②29都道府県で実施されていて、ほぼ全国で受け入れ活動がされていること、③開催団体の69%が任意団体であり、有給スタッフを持たない団体も69%となること、④保養のみ行なっている団体の収入の割合は寄付金71%、助成金15%、自治体の補助金1%、参加者の参加費4%となること、⑤開催団体からの改善希望として「国や自治体で保養をやってほしい」という要望が突出していることなどが指摘されている。つまり保養プログラムの多くは、私たちEIWANと同様、資金不足・人手不足の中で、任意団体によるボランティア活動として、何とか継続されているのである。また同報告書では、共働き世帯やシングルマザー家庭などでは依然として「保養に行きにくい」問題点の現状も指摘されているが、それは福島の移住女性たちも同様であり、より深刻である。

○2016年夏、私たちは幸いにも3つの保養プログラムを実施／支援することができた。

#### **《和歌山キャンプ》**

○7月27日～8月3日、7泊8日の「あいあい自然キャンプ in 紀伊田辺」が実施された。須賀川市「つばさ」といわき市「心ノ橋」から子ども9人、お母さん4人が参加した。受け入れは、愛徳カルメル修道会のシスターたちを中心とする「さよなら原発の会」。彼女たちが企画・準備・運営すべてを担い、経費はカトリック大阪大司教区の献金などによって支えられた。

○この5年間、海で泳ぐことができなかった福島の子どもたちは、教会の前にある海水浴場で思いっきり泳ぎ、お母さんたちは毎日温泉を楽しんだようである。

○私たちEIWANは、参加者募集と参加申込書の作成を手伝っただけであり、「さよなら原発の会」の神父、シスター、信徒の皆さんに、感謝するばかり。

#### **《京都保養プログラム》**

○8月4～8日、4泊5日のリフレッシュ・プログラムに、福島サロン学習者のフィリピン女性とその子どもたち家族3組が参加した。期間中、京都は連日35度を超える猛暑の中でも、プールに行ったり、宇治の山間の古民家で川遊びをするなど、涼に親しむプログラムとなった。

○この京都プログラムは、なかなか保養に行けないフィリピン人女性とその子どもたちを対象に行なっていて、今回で3回目となる。夏はとりわけ忙しい中で、毎年受け入れてくれる京都YWCAの皆さんに感謝。

#### **《夏の一泊バスツアー》**

・実施日：8月27日（土）～28日（日）

・行き先：福島—白河—大内宿—深沢温泉—森の分校ふざわ—梨狩り「自宇園」

・参加者：33人（白河サロンス20人＋福島サロン4人＋実行委員とその家族9人）

- 放射能汚染による被災で、福島で暮らすことのストレスを感じているのは、外国にルーツのある人びとも同じである。そのような中、EIWAN の活動を開始した当初から、移住女性とその家族および子どもを対象にした保養の一環として、年 2 回のペースでリフレッシュ・バスツアーを実施してきた。このプログラムの主な対象は、一般募集から、徐々に活動が安定してきた EIWAN 日本語サロン白河教室と福島教室の学習者に移行している。回を重ねた参加者のアンケートでは、家族単位での宿泊を伴うプログラムの希望が高く、2016 年、初めて一泊バスツアーが実現した。
- バスツアーの目的は、保養に加え、各日本語クラス参加者の交流、生活している福島県の良さを体験する、日本文化にふれることである。総勢 33 人の参加者が、福島県山中に残る江戸時代の街並み大内宿を散策し、温泉を体験し、昔小学校であった木造校舎で宿泊し、地元の方々とふれあった。最後には白河サロンに参加している移住女性の家族が経営する梨園「自宇園」で梨狩りを楽しんだ。同じ福島県内でありながら、多くの参加者が「初めて訪問した」と、アンケートに回答した。
- 夫婦、親子で参加した人が多く、日頃の日本語学習とは違う一面や生活を垣間見ることができた。また移住目的も、結婚、仕事（出稼ぎ）、研修、留学など多様でありながら、地域での生活に必要な不可欠な「日本語学習」という共通点で、一種の EIWAN コミュニティが形成されつつあることに、EIWAN の活動が地域に根つきつつあることを確信した。
- 次回は、ボランティアで関わっている地元の日本語サポーターが参加できることを願っている。

#### (6) 移住女性「ふくしま My Story」記録化

- 3月11日、EIWAN は福島で暮らす6人の外国出身女性たちのストーリーを収めた冊子『か・ら・ふ・る～福島で暮らす外国出身女性たちとその家族の My story～』（A5判・64ページ）を発行した。それぞれのライフ・ストーリーが持つ鮮やかな「ちがひ」が少しでも伝わるように、冊子のタイトルを「か・ら・ふ・る」とした。
- この冊子に収められているストーリーも、語り手たちの思いも、まさに多様で色とりどりだ。彼女たちは、さまざまな経緯で日本に、そして福島にやってきた。たとえば、日本人男性と出会って福島にやってきたり、家族を助けたいという気持ちに動機づけられたり。皆さまざまな事情と想いをかかえて、母国から遠く離れた福島を「home」として暮らしてきた。語り手たちはみな、EIWAN の活動を通して知り合った中国とフィリピン出身の女性たちだ。
- 彼女たちへのインタビューは、一人につき3時間、長くかかった場合は5時間にわたった。時に彼女たちは、福島に来たばかりの辛い時期や、家族に十分に思いが伝えられなかったもどかしさを思い出して、涙を浮かべながら語ってくれた。また興味深い話を聞いては、聞き手も一緒に笑ったりもした。東日本大震災後の避難行動についての語りからは、彼女たちがいかに懸命に自分たちの家族を守ろうとしたことが伝わってきた。年齢も生い立ちも異なる彼女たちは、自分の人生を切り開くために、また、家族とともに幸せになるために福島にやってきた人たちである。冊子に収める際は、彼女たちのストーリーを、① 生い立ち、② 来日経緯、③ 福島に来てから現在までの暮らし、そして④ 東日本大震災の経験の4点に沿って構成した。
- 語り手によって経験や感じ方、そしてもちろんこれからの夢や目標も多彩だ。その点で、これらのストーリーのなかには、語り手それぞれの「ちがひ」が多分に含まれている。しかし同時に、周囲や家族との関係、子育ての悩みを抱えながら懸命に働いて暮らしてきたという点では、どのストーリーも地域に住む多くの人たちと「おなじ」でもある。私たち EIWAN は、この冊子が、彼女とその家族のストーリーが記憶され、お互いの「ちがひ」と「おなじ」を理解し考慮しあえる一助になることを願ってやまない。
- 移住女性たちからの聞き取り、編集、印刷などの諸費用は、藤枝濤子基金の助成金（2014年）によって支えられた。
- 2017年春には、この冊子の英語版を発行する。

## (7) 相談と同行支援

- このプログラムは、労働・生活・DV・在留問題について、これまで支援情報と支援手段から遮断されてきた移住女性が、適切な助言と同行支援を通して具体的な解決方法が得られるようにすることを目的とする。
- 2016年、EIWANに寄せられた相談事項は、主に2件である。
  - ＜母親が外国出身者で仮設住宅に住む子ども＞  
子ども本人が住む仮設住宅地区の支援者からの相談であり、本人の生計と教育を含めた生活全般で多くの課題があった。詳細を聞くにあたり緊急性はなかったものの、私たちが支援策を検討している間に、その子どもは母親の出身国へ移住した。
  - ＜日本人配偶者に先立たれた外国出身女性＞  
福祉事務所からの相談であった。数年前に配偶者である日本人男性に先立たれたが、本人は日本語がほとんど理解できないまま、厳しい経済状況の中で子育てを継続していた。遺族年金制度などについて、本人の母国語での説明が必要であり、EIWANから、本人の同国出身者に通訳と同行支援をお願いし、さまざまな手続きを行なった。
- 上記のケースは、おそらく氷山の一角の事例であると思われる。私たちは今後も、あらゆる機会を通して移住女性たちに、適切な助言と、可能な支援を続けていきたい。

### 《外国人の社会保障ハンドブック》

- 11月19日、『外国人の医療・福祉・社会保障ハンドブック』（B5判・190ページ）を発行した。これは、1995年の阪神・淡路大震災のあとに生まれたNGO神戸外国人救援ネットが作成した『外国人相談の手引』（2009年）をベースにして、まとめたものである。2013年に出版企画を立て、NGO神戸外国人救援ネットと編集作業に取りかかったが、完成までに時間がかかってしまった。それは、2012年の外登法廃止と入管法・住民基本台帳法の改定によって、社会保障の各制度に関わる政令・省令・通達・取扱要領などが全面的に改定され、それらの「基本資料」を集めることに時間がかかったからである。
- このハンドブックは、日ごろ外国人と接することの多い日本語教室や国際交流協会、NGO、NPO、自治体職員、教員の方々に活用してもらおうと、現在私たちが入手できる政令、省令、通達、通知をもとに、各制度の実際の運用について、わかりやすく解説した。
- 1000部印刷して、福島県内は無料配布、県外は実費で頒布した。なかなか好評で、発行3カ月で在庫なし、となった。

## (8) ネットワークづくり

- 移住女性の中には、震災と原発事故によって避難を余儀なくされた者、職を失った者、夫の失職によって働かなければならなくなった者など、苦境に立たされた者が少なくない。しかし、このような彼女たちを多言語でサポートする行政機関の体制は十分ではない。
- そのような中で震災後、移住女性たちは自助組織——福島市「ハクカマイ福島」、白河市「ハクカマイ白河」、そして須賀川市「つばさ」、いわき市「心ノ橋」、そして郡山市「幸福」を結成した。しかし、いずれの組織も小さく、地域社会への発信回路を持たない。したがって、これらのグループが自立して活動を継続していくためにも、各グループをつなぎ、強化していくことが重要である。
- そのために、11月の子どもフォーラムに合わせて、福島県内の移住女性たちのグループによる円卓会議を企画した。フォーラムの第二部で、中国人グループの結集というところでは実現したが、当初企画した目標が十分に達せられたとは言えない。それは、2017年の課題としてある。

○移住女性がいま直面している諸課題を解決していくには、福島県内の国際交流協会や日本語教室などの外国人支援団体、また女性支援団体との連携が不可欠である。さらに、自治体との連携、地域社会からの支援が必要である。前者についてはこの間、少しずつ連携が進んでいるが、後者の課題については緒に就いたばかりである。

## （9）情報発信

○震災後5年から6年目へと、時間の経過と共に、忘れ去られていく被災者と被災地という状況がある。これに対して、被災者、とくに移住女性とその子どもたちの思いと願いを、日本社会に、そして世界に発信していくことを私たちはめざしている。

○2014年3月から『EIWAN ニュース』を隔月で出すことにし、現在まで第17号まで発行した（毎号4ページ、500部発行）。そこでは、福島の移住女性とその子どもたちが置かれている状況と、彼女たちの思い、支援活動の中から見えてきた課題などを伝えている。

○2014年2月から、外キ協のホームページに EIWAN のページを設けて、最新情報と活動報告を掲載（年間報告書の英訳も掲載）。

<http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan/>

○2014年3月から、フェイスブックを活用して、広く県内の移住女性や関係団体にプログラムを告知している。

<https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

## ◆活動を支えられて……◆

○東日本大震災・原発事故から6年目。たった4人で始めた私たち EIWAN の活動も、5年目に入った。今では、小さな事務所兼活動スペースを活用しながら、運営委員10人、協力委員4人、そして多くのボランティアで、上記のさまざまなプログラムに取り組んでいる。

○2016年は幸いに、福島の企業人たちが設立した「ふくしま未来基金」（運営：パブリックリソース財団）から継続して助成金をいただいた。また CGMB（アメリカ共同世界宣教）、UCC（カナダ合同教会）から献金が寄せられ、日本の教会・キリスト教学校・団体・個人から、心がこもった献金が寄せられた。

○このような熱い励ましを受けて、私たちは2017年も活動を続けている。

## 活動日誌◆2016年（日本語サロンを除く）主催・共催プログラム／会議／出張

1月11日●『EIWAN ニュース』第12号発行。

1月16日●いわき市「心ノ橋」の新年会に参加。日本人と結婚していわき市に住む移住女性をはじめ、中国帰国者の高齢者や留学生など、震災後5回目の正月を迎える80人が参加。

1月17日●EIWAN 運営会議。活動開始から5年目に入った EIWAN の取り組むべき課題は多岐にわたるが、その一つ一つを検討し、2016年の活動計画を話し合う。運営会議のあと、韓国移住女性をゲストスピーカーとして迎えて、第11回「からふるカフェ」を開催。

1月28～29日●外キ協第30回全国協議会で、EIWAN の2015年活動報告と2016年活動計画を提案し了承される（東京）。

1月30～31日●山形県酒田市で「やさしい日本語で防災」出前講座。

1月31日●郡山市「幸福」の新年会に参加。発足してまだ1年にならないが、継承語教室を確実に進めていることが感じられた。

2月5日●外キ協とNCC 在日外国人の人権委員会の共催で、「福島の移住女性から話を聞く東京集会」を開催。須賀川市「つ

ばさ」の移住女性が、この間の歩みを証言してくれる（東京）。

2月6日●前日に続いて、神奈川外キ連の主催で、「福島に移住女性の証言集会」（横浜）。

2月20日●「ドリーム・マップ——未来をデザイン」と題して、第12回「からふるカフェ」開催。

2月21日●EIWAN 運営会議。4月から事務局専従者を置かず、10人の運営委員が分担して各プログラムを準備・運営していくことにする。

3月11日●『か・ら・ふ・る——福島で暮らす外国人女性たちの My Story』発行。また『EIWAN ニュース』第13号発行。

3月13日●EIWAN 運営会議。そのあと、第13回「からふるカフェ」を開催。「多文化と子どもの成長」と題して、日中ダブルの大学生に話してもらう。

4月10日●白河サロンで「やさしい日本語で防災ワークショップ」を開催。

5月11日●『EIWAN2015年報告書』（日・英）を発行し、支援してくれた海外・国内の諸教会・団体に送る。また『EIWAN ニュース』第14号発行。

5月22日●EIWAN の運営会議。そのあと「第14回からふるカフェ」として「からふる食堂」。

5月27日●11月に開催する「子どもフォーラム」第1回準備会、主催4団体（EIWAN・つばさ・心ノ橋・幸福）が集まり、開催日程と会場を決める。そのあと、駐新潟中国領事館の呼びかけで開かれた「東日本大震災 福島華僑華人懇談会」に参加し、EIWAN の活動を報告。懇談会には県内の中国人グループの他、県と各市の担当者も出席して報告。

6月16日●福島の企業家たちが設立した「ふくしま未来基金」の2017年度助成金の授与式。EIWAN は「子どもフォーラム」と「からふるカフェ」の実施費用として、前年と引き続いて助成金をいただく。

6月18～19日●蓬莱日本語教室の主催/EIWAN の共催で「多文化キッズキャンプ」。国立磐梯青少年交流会館に、外国にルーツを持つ子どもたちとそのお母さん、ボランティア、計50人が集合する。

6月23日●福島県国際交流協会を訪ねて、11月の「子どもフォーラム」への協力を依頼。

7月3日●福島サロンから2人、白河サロンから12人が日本語能力試験に挑戦。

7月3日●EIWAN 運営会議、福島・白河サロンの運営について話し合い、夏の保養プログラムの準備を確認。

7月9日●郡山市で「子どもフォーラム」第2回準備会、要項案をまとめる。

7月10日●白河サロン「サマーパーティ」。

7月11日●『EIWAN ニュース』第15号発行。

7月27日～8月3日●和歌山子どもキャンプに、須賀川市「つばさ」といわき市「心ノ橋」の子どもとお母さん、計13人が参加。準備と受け入れは、愛徳カルメル修道会のシスターたちを中心とする「原発さよならの会」。

7月27日●30年後の福島をめざすことを掲げる「ふくしま未来基金」の2015年報告会に参加。

8月4～8日●京都保養プログラムに、福島日本語サロンのフィリピン女性とその子どもたちが参加。受け入れは京都YWCA。

8月26日●兵庫県国際交流協会・神戸定住外国人支援センターが主催する多文化共生研修会で、EIWAN は須賀川市「つばさ」と共に、「被災地福島の移住女性と子どもたち」を報告。

8月27～28日●EIWAN 主催の一泊2日のバスツアー。福島サロンと白河サロンの学習者とその家族、サポーター、計33人が参加。

9月11日●福島県男女共生センター・未来館（二本松市）で第15回「からふるカフェ」を開催し、仙台から田所希衣子さんをお招きして「多文化と子どもの進学について考える」。

9月11日●『EIWAN ニュース』第16号発行。

9月17日●福島市国際交流協会主催「結・ゆいフェスタ2016」に参加。

9月23日●午前、EIWAN 事務所で復興庁のヒアリングを受け、午後は「ふくしま未来基金」のヒアリング。夕方は郡山市で「子どもフォーラム」第3回準備会で、最終打ち合わせ。

10月5日●会津喜多方国際交流協会で「やさしい日本語で防災ワークショップ」開催。

10月23日●EIWAN 運営会議、2017年の活動方針について話し合う。多くの団体が東日本震災から5年、6年を区切りに被災地から撤退あるいは転進していく中で、中長期展望をもって福島でどのように活動していくのか——その難問の正解はなかなか出ず、継続して討論することに。

10月27日●神戸外国人救援ネットと数年ごしの共同作業となっていた『外国人の医療・福祉・社会保障ハンドブック』編集の最後の打ち合わせ（姫路）。そのあと、カトリック梅田教会での和歌山キャンプ報告会に参加（大阪）。

11月18日●郡山市役所に「やさしい日本語で防災」出前講座。

11月19日●「第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラム」を郡山で開催。雨にもかかわらず、外国にルーツをもつ子どもたちが約60人、移住女性たちが約60人、一般参加者をふくめて、計170人が参加。

11月19日●『外国人の医療・福祉・社会保障ハンドブック』を発行。1000部印刷して、300部を福島県内で無料配布。

11月20日●EIWAN 運営会議、2017年の活動方針について話し合い、悪条件にもかかわらず活動を継続していくことにする。

11月21日●『EIWAN ニュース』第17号発行。

11月26日●EIWAN主催「第16回からふるカフェ」を、縄文時代の遺跡「じょーもびあ宮畑」で開催。福島サロンの学習者とサポーター15人が参加。

12月4日●福島サロンから3人、白河サロンから24人が日本語能力試験に挑戦。

12月17日●福島サロンの「おつかれさま会」。

12月18日●白河サロンの「クリスマスパーティ」。

## ●ふくしま移住女性アピール 2016●

東日本大震災から、すでに5年7カ月が経過しました。私たちはきょう、福島県郡山市で「第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラム」を開催しました。第一部では、福島県、宮城県、山形県、新潟県でおこなわれている継承語教室（中国語／韓国語教室）に通う子どもたちの発表があり、第二部では、各教室の報告と、移住女性たちの切実な願いについて話し合いました。

私たち移住女性は、日本社会の一人の構成員として、日々、平凡に暮らしています。母として、妻として、仕事をもつ女性として、日本社会の小さな一助になるために、日々、努力しています。

ただ、一つ違うのは、私たちには日本語や日本の文化以外に持つ固有な言語と文化がある、ということです。そして私たちは、私たちが持っている母語と文化を、自分の子どもに継承させたいと願っています。なぜなら、それが、私たちが自分の子どもと意思疎通する手段であり、自分の子どもたちに残せる資源だからです。

しかし、ある人は言います。「ここは日本だから、子どもに弱かな国の言語と文化を教える必要はない。日本語と日本文化に精通すればいい」。また、ある人は言います。「日本で生まれて育った子どもに、あなたたちの言葉や文化を教え込むと、アイデンティティの混乱だけが生じる」。中でも一番響くのは、次の言葉です。「子どもが、親のルーツでいじめられる」。

かつて、私たちの先輩たちは、実際にそのような差別を受け、中には自分たちのルーツを隠したり、中には閉鎖的な移住者コミュニティを作ったりしました。しかし、私たちはここで宣言します。そのような考えは、もう旧時代のものです。

私たちは2011年の東日本大震災で、いやになるほど経験しました。それは、毎日のようにさんざん言われた「キズナ」の重要性です。家族内の絆、地域社会内の絆、国民としての絆、さまざまな絆が言われましたが、その中には国際社会との絆も大きかったと思います。そして私たち移住者は、日本社会と国際社会をつなぐ「キズナ」の橋渡し役ができるということに気付かされました。

私たちが、子どもたちに自分の母語と文化を継承させたいと思うのは、将来、子どもたちが日本と国際社会をつなぐ役割をしてほしい、という願いを込めてです。そして、その役割を通して、私たちも日本社会に寄与できるということなのです。

ただ、このような志から始めた私たちの活動は、必ずしも、たやすいものではありません。手弁当で、自分の時間と能力と経費を使いながら奮闘しています。平凡な私たち移住女性の力だけでは、いつまで続けられるかも不安です。移民政策を公式化しない日本政府の方針により、自治体からの後押しを得ることも難しいというのが現状です。私たちの活動に、日本人の支援者を得るのも大変です。

他国や他県では、このような継承語教育、母語教育が議論され、学校教育の中に含まれるケースもあると言われますが、ここ東北では、そういう動きまでにはまだ至っていません。

むしろ、子どもたちが中学生以上になると、一律化された教育システムの中で内申書に反映されるクラブ

活動のみが優先され、継承語教室に通えなくなるのが一般的です。多様性を育てなければならない学校教育が、逆に多様性を失わせる結果になっていると言わざるをえません。教育委員会の方々は、子どもたちの多様な活動が学校教育現場で認められるような仕組みを、ぜひ検討してください。

私たちのこのような願いは、私たちだけの提案ではありません。日本の教育現場に、より多様さを認める仕組みで、イジメをなくし、多様な子どもたちが生き生きと教育を受けることができるのではないかと、思います。

継承語教室を運営し地域社会と交わる私たちたちのさまざまな取り組みが、その小さい一歩でありたいのです。私たちは、これからもがんばります。ただ、私たちを孤立させないでください。

私たちは多くの方々と連携しながら、子どもたちの未来のためにも、私たちが住むこの社会を、多様さで豊かな社会に築いていきたい、と思います。

2016年11月19日

第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラム参加者一同

福島移住女性支援ネットワーク／つばさ～日中ハーフ支援会／福島多文化団体～心ノ橋／

日中文化ふれあいの会～幸福／ハンゲル学校宮城／山形ムゲンハ学校／瀛華中文学校／上越中文教室

福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)		発行◆2017年3月11日
◆連絡先◆	〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 電話：080-8215-1556 メール：eiwan311@gmail.com ホームページ <a href="http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan/">http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan/</a> フェイスブック <a href="https://www.facebook.com/eiwanfukushima">https://www.facebook.com/eiwanfukushima</a> [東京連絡先]電話(03)3203-7575 (RAIK) /メール：raik@kccj.jp	
◆献金先◆	郵便振替 □座番号：00920-0-144820 □座名称：福島移住女性支援ネットワーク	